

理事が語る

新潟国際情報大学
小林満男

このたび、縁があって理事に選任されました小林満男と申します。企業に 35 年在職し、役職定年を機に 6 年前から本学会の元会長である竹並輝之先生の後任として新潟国際情報大学に勤務しております。まずは自己紹介をさせていただきます。

小学生の時に『子供の科学』の付録についてきた鉱石ラジオの組立てをきっかけに電波に興味を持ちました。電波高専 3 年生の時に第 1 級無線通信士の資格を取得し、4 年生夏の学外実習では電電公社銚子無線電報局でモールス通信による外国航路の船舶との公衆無線通信業務を経験しました。それが縁で昭和 51 年 4 月、電電公社に入社。長波 40kHz の標準電波、中波・短波・超短波帯の専用無線からポケットベル、11/15GHz 帯の都市内マイクロ無線方式などの保守運用を、さらには昭和 54 年 12 月 3 日に東京地区で商用サービスを開始した自動車電話システムの建設工事に 2 年間従事することができ、無線技術者として貴重な経験を積ませて頂きました。

昭和 60 年 4 月、電電公社は民営化により NTT へ。当時の総裁（社長）である真藤恒氏の「ソフトウェアは電気通信事業の要、自社開発は必須」との方針で設立された中央ソフトウェアセンタ（後の NTT コムウェア）へ“異動”となりました。ソフトウェア開発の仕事は未経験でしたが、3 月に夜間大学を卒業したばかりの私は NTT に“入社”した気持ちで新しい仕事に挑戦したことを覚えています。衛星中継網方式(DYANET)という地上回線が輻輳した際にコール・バイ・コールで衛星回線により迂回中継する世界で初めてのシステムで、プロジェクトリーダーとしてその衛星回線を制御するソフトウェアの開発に従事しました。開発言語は Ada で、“モジュール化の推進”が大きな課題でした。無線技術者が SE に変身（脱皮？）した時期であったように思います。ソフトウェア開発業務に 7 年間従事した後は、法人営業マネージャとして新規事業会社の立上げなどを担当しました。

大学教員になってみて、無線技術者から SE を経て法人営業マネージャを経験したことが学生の教育や進路指導あるいは学会活動などにおいて大いに役立っているように感じます。法人営業に長く従事したことから結果的には専門分野を深めることはできませんでしたが、その代わり他の分野の研究者や技術者、営業担当の方々と知り合い、多くのことを学ぶことができました。私が入社した昭和 50 年代はじめと現在では比較出来ないくらい、技術もその利用形態や生活様式も変わってきています。AI/IoT、VR/AR/MR 等の話題が毎日のようにメディアに登場する今日、情報システムや情報通信技術が単独で何かに役立つ時代は次第に遠のき、「〇〇×ICT」に象徴されるように何をやるにも他分野とのコラボレーションが益々重要になってくるように思います。

さて「東京 2020」が近づいてきました。東京の文字を本学会に置き換えてみませんか？

本学会の会員の方なら「情報システム学会 2020」のイメージは、フルカラーで見えてくることでしょう。それでは、自分たちの子供たちが主役となるであろう 30 年後の「情報システム学会 2050」のイメージはいかがでしょうか。数年先と同時にさらにその先、次の世代が活躍する時代に思いをはせることも大事なことかと思えます。

情報システムの企画開発、情報や情報システムの戦略的な利活用の最前線で活躍されている企業の経営者や技術者たちと大学教員らが学会という場で連携できれば情報システム学会はさらに魅力ある学会となるはずです。実務経験を有する教員として微力を尽くしてまいりたいと思えますので、どうぞよろしく願いいたします。

(以上)